

農村地域の年中行事

※季節と行事は地域により多少異なる。

冬	秋	夏	春	季節
<p>祈年祭</p> <p>毎年2月に行われ、一年の五穀豊穡を祈る。新嘗祭と対になる宮中行事。としごいの祭ともいわれる。</p>	<p>刈り上げ</p> <p>稲の収穫祭であり、春に田の神となって田を守った神が、山へ帰るので、新餅について感謝する。</p> <p>新嘗祭（いになめのまつり）</p> <p>新は「新穀」、嘗は「馳走を意味する。宮中で新穀を神に奉り収穫を感謝する。毎年十一月二十三日に行われ、現在は勤労感謝の日として国民の祝日となっている。</p>	<p>雨乞い</p> <p>田んぼの水が不足する時に、沼・滝壺にいとされていた竜神様にお供えものをして祈願し、雨がふるよう願った。</p> <p>虫おくり</p> <p>害虫から稲を守るといふ願いを込め、松明をかざしカネやタイコをたたき田を練り歩き追い払う</p>	<p>水口祭</p> <p>田んぼの取水口（水口）に土を盛り、茶碗に盛った飯やお神酒をお供えして豊作を祈願する。</p> <p>御田植祭</p> <p>農作業の行程を模擬的に演じ、豊作を祈念する神事。</p>	<p>主な行事</p>

小田島田植踊

【東根市小田島】

稲作農耕の過程を歌と身振りで演じ、五穀豊穡を祈った予祝踊り。以前は小正月の行事の一つだった。



虫おくり

【酒田市広野】

カヤで作った虫おくり船を担ぎ、行列を組んで太鼓を叩き町内を練り歩く。一時期休止していたが保存会が中心となり伝統を復活させている。



伝統の継承・復活

農村地域には、田や畑での作物の生産機能以外にも、国土の保全や自然環境の保全など様々な大切な役割を持っている。（農地の多面的機能）

昔から培われてきた、技術や文化の継承も農村地域の大切な役割として位置づけられている。

農村地域の祭事の多くは、後継者不足等の理由から休止を余議なくされている。しかし、最近では、本来の意味である神に感謝し、農耕の無事を祈るといふものに加えて、新たな農村地域の魅力を発信する場、都市部との交流の場として古くからの祭を復活させている地域も増えている。

農村のまつり



～五穀豊穰を願って～

あの有名な
祭も…



新庄まつり【新庄市】

山形を代表する祭も実は五穀豊穰に由来する。

1756年、当時の領主戸沢正誼（とざわまさのぶ）が前年の大飢饉に打ちひしがれた民に活気を与え、豊作を祈願するために始まったとされている。（毎年8/24～8/26開催）

農村にとつてのおまつりとは

日本の年中行事や祭事の多くは、稲の豊作を祈る・感謝するなど農耕の祭事に由来する。これらは、都市部では失われつつあるが、農村地域では、農業活動を通じて、それぞれの地域で、季節に応じた様々な伝統的な行事や祭などが今も受け継がれている。

そもそも「まつり」とは「神に供物をたてまつる」ことであり、その供物を直会（なおらい・・・神事終了後の共飲・共食儀礼）をすることである。

技術が進歩していなかった古代農業は、それだけ自然に頼ることが多く、特に天候の変化に対しては敏感であった。農業は自然との闘いであり、それだけにまた神のまつりも丁重に行われた。雨が続けば晴天を願い、晴天が続けば雨を乞い、風が吹けば鎮まることを祈った。まつりとは、それだけ神・自然と密接な関係があった。

タイトル写真：「田植歌に誘われて」
（撮影場所：白鷹町 「畔藤田植踊り」
第19回やまがた農村フォトコンテスト
入選 長井市 田代 功さん